ブーム・エアリス

紅月 時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブーム・エアリス

【Ｎコード】
Ｎ４２０２Ｐ

【作者名】
紅月　時夢

【あらすじ】
平和な空間は、彼女たちによって壊される。巷で流行りだした髪型に振り回され、敵も味方も入り乱れる。クラウドの敵は一体誰？！手を組んではならない者たちが手を取り合った瞬間、彼の悲劇は幕を開ける――――……。

ある日の午後、特に襲ってくる魔物もいず、久し振りの平和さで旅を続けているクラウド達。
今はのんびり川辺で休憩中だ。
川のせせらぎを聞きながらまどろんでいる金髪のツンツン頭はもちろんクラウド。
右側に自分の身長と同じ、いや、少し短めの愛剣を置き、腕枕をして横になっている。

――――平和だ。

クラウドは思う。
だが何故だろう。
この平穏は長く続かないきがする。何かに邪魔されるような気がしてならないのだ。
それも、魔物などに襲われるのではなく、もっと質の悪いもののせいのような気がして……。

「クラウド――！」

自分を呼ぶ声が聞こえ、ゆっくりと目を開ける。
すると、自分の方へ向かって髪を揺らしながら走ってくる女性の姿が目に入った。

「クラウド見つけた。こんな所にいたんだ」
「あぁ、ティファか」

眠い目を擦りながらも、彼は起き上がって座る。そんなクラウドの隣にティファは腰をおろした。

「ん？何かいつもと違うな」
「あ、気付いた？」

いつものティファとは、何かが違うらしい。
だが、それに気付くクラウドも珍しい。何といっても彼は、超の付く鈍感なのだから。

「ほら！今巷で男女問わず、子供から大人まで大人気の髪型、名付けて……エアリス・ヘアー！」

自分の髪をクラウドに見せるティファ。

「へー」

今、男女問わずって言わなかったか…？

クラウドは今、ティファから異様な言葉を聞いた気がした。
でも、ティファには結構エアリス・ヘアーが似合っていた。黄色の

リボンでくくっているのだが、それも似合っていた。
それにしても、一体いつの間にこの髪型にしたのだろうか？
実を言うと、この川辺に来たのはついさっきのこと。エアリスと同じ髪型、つまり、あのパーマをかけるにはかなりの時間がかかる気がしてならないクラウドだった。

「それでね、ある人もこの髪型なんだよ。クラウドが当たり前によーく知ってる人」

クラウドは嫌な予感――――さっき質の悪い――――が的中したとその瞬間に悟った。

「まさか……」

――――巷で男女問わずの大人気…。
その言葉が出てきていて、長髪のあいつが犠牲にならないはずがない。

「そのまさか！たぶんクラウド、当たってると思うよ。ユフィ、準備出来た？」
「もうばっちし！あぁ、もう逃げないでよ！！」

茂みの向こうから二つの足音が聞こえてきた。少しずつ近づいてくる。
一つは楽しげなスキップの音、もう一つは何かを引きずるような音。
足音の主はユフィと今回の犠牲者のもの。もちろんスキップの音がユフィで、引きずるような音がユフィに引きずられている犠牲者のものだ。
ユフィが満面の黒笑みを浮かべて犠牲者の腕を掴んだまま、同じく

黒い笑顔満面のティファ、そして自分の恐ろしい予感で固まってしまい動けないクラウドの前に連れてきた犠牲者は彼の予想通りの……

「ヴィンセント…！！」

犠牲者の名を呼ぶクラウド。

クラウドの目に一番最初に映ったのはいつも彼が着ている赤いコート。だが……次に目に入ったのは、黒く長い髪にくくられた赤のリボン。しかもかなり長く、どのくらいかというと、ヴィンセントの髪より少し短いくらいだった。
綺麗な黒の長い髪には、これまた美しく綺麗なパーマがかかっており、赤が黒によく映えていた。

しかし、肝心の彼の顔はやはりと言うか何というか……。
パッと見ただけでも分かる程に青冷めていた。当たり前の反応だとしか言いようがなかった。

「一体、何があったんだ？」

恐れと好奇心がクラウドの心を満たしていた。しかし、好奇心が勝ってしまったようだ。
ヴィンセントは思い出したくないからか、口を開こうとさえしない。代わりにユフィが喋りだす。

「えーとねー、ティファが用事あるからってヴィンセント呼び出して、無防備だったお腹殴って気絶させて、ティファがクラウド起こしに行ってる間にあたしがヴィンセントの髪をエアリス・ヘアーに

したんだ。ヴィンセントが目を覚ましたのは全部終わってから。逃げようとするのを止めるのは大変だったんだから！」

「お疲れ、ユフィ」

さも自分は頑張ったんだとでもいうようにべらべら喋り、偉そうに胸を張っている。自分のしたことに満足しているのか、目はキラキラと輝いていた。

そんなユフィをねぎらうティファも、表面は笑顔だがかなりの腹黒だ。

それにしても、ヴィンセントが逃走をはかったのは誰にも見られたくなかったからだろうし、ティファに対し無防備だったのも、まさか仲間に腹――――つまりはみぞおち――――を殴られるとは思いもしなかったからだろう。

――――ヴィンセント…。

同じ男として、同情や憐れみの念を抱かずにはいられないクラウドだった。

彼らの心境など露程にも知らない女性陣は、互いによくやったと褒め合っている。

クラウドは立ち上がり、ヴィンセントの元へ歩いて行く。

怒りか、悲しみか、屈辱からか、はたまたどうすることも出来なかった自分への怒りか…、いずれにせよ、小刻みに震えている彼を慰めるように肩をポンポンと叩いた。もちろんヴィンセントの心情を

察して彼の方を見ずに。

「それにしても、ヴィンセントの髪なんていつでもあんな風にできる訳じゃないから弄るの楽しかった！」

「私もすればよかったな。結構楽しそうだよね。弄るの想像するだけでも面白いし」

「でしょー！！」

笑いでかなり盛り上がっている腹黒腐女子たち。

その腹黒腐女子たちに忘れられ、この光景を傍観者として見ているクラウドと、今回の腹黒腐女子たちの犠牲者ヴィンセント。

この瞬間、彼らは誓ったという。

“この二人には何があっても、逆らわないでおこう”

と…。

逆らえば何をされるか分からない。今回の出来事で彼らはそう学んだ。

直後、空から声が降ってきた。

「なんだ。お前たちもそうだったのか」

その声にはもちろん、この場の全員が聞き覚えがあり、一斉に空を見上げた。

空に浮かんで、いや、飛んでいるのはやはり、

「セフィロス…！！」

クラウドが怒気を孕んだ声を絞りだす。
宿敵であり、エアリスを殺めた者。まだまだ記憶に新しいその出来事を、クラウドは忘れてなどいない。
不意にクラウドがヴィンセントを見やると、今の自分の格好を見られたショックからか、カチコチに固まってしまっていた。
その時、ヴィンセントを見てふとクラウドは思った。

――――何故セフィロスは“お前たちもそうだったのか”と言ったのか？

その理由を、ヴィンセントを見た瞬間にクラウドは確信してしまった。
恐ろしい予感を胸にして息を呑みつつ、再びセフィロスを見上げる。
セフィロスが放ったあの言葉の真意は。

「……」

恐ろしい考えが頭から消えず、セフィロスを見上げたまま絶句するクラウド。

「…まさか、お前もか…セフィロース！！」

ゆっくりと地面に降りてくるセフィロスにクラウドは叫ぶ。
叫ばれた当の本人と言えば、よくわからない不適な笑みをたたえている。

「ほう、よくわかったな。クラウド」

クラウドは、改めて地面に降り立ったセフィロスを見て完璧に言葉を失った。
漆黒の片翼の翼をしまいながらちらっとヴィンセントを見て、彼は静かに言葉を放った。

「意外だったぞ、ヴィンセント。まさかお前がその髪にしているとはな…」

セフィロスが呟いた。

「き…貴様に言われたくはないな！自分でやりたくてやった訳ではない！」

やっと言葉を取り戻したヴィンセント。
だが…気のせいなのだろうか。
ユフィとティファに対しての怒り、普段から溜まっていたストレスが今がチャンスだといわんばかりに発散されている気がする。
いつもの彼のクールさが消えている。

因みに、ユフィはともかく、ティファは素手でかなり強いので、ク

ラウドやヴィンセントでも簡単に勝つことは出来ないのだ。
後、ヴィンセントの言葉通り、あのセフィロスが……元英雄でクールだと言われたあのセフィロスが、エアリス・ヘアーをしているのだ。
しかもリボンの色は黒。これまた長く、セフィロスの髪より少し短いくらいだ。
つまり、ヴィンセントのリボンより長いのだ。
「……エアリス…ヘアー。まさか、貴様が」
途切れ途切れながらも言葉を紡ぐクラウド。
「嘘、セフィロスが？いくら巷で男女問わずの大人気でもアイツがやってるとは思わないって。いやホントに」
そう言ってまくし立てたのはユフィ。
「でも、結構似合うかも…」
……今の爆弾発言はティファだ。流石腐女子。ティファはここで腐女子のリーダーに任命しておこう。
「嘘だ…。嘘だと言ってくれ…セフィロス！お前までそっちの世界に行くんじゃない！！」
現実を受け入れたくないあまりに、普段と纏う気配が少し変わってでも叫ぶクラウドだが、セフィロスからは非情――いや、異常な言葉が発せられた。

「何を言っているのだクラウド。貴様もヅラでも被って今流行りのエアリス・ヘアーを堪能してみろ。私が来たのは、この素晴らしいエアリス・ヘアーを貴様らに教えに来てやったのだ。この私がわざわざ直々にだぞ。ありがたく思え」

流石にこの言葉には腐女子の二人も言葉を失ったかに見えた。っていうか、セフィロスがヅラって……。現実の異常さに最早誰にも突っ込めない。

「そーだね。ヴィンセントだけエアリス・ヘアーしてるなんて駄目駄目、おかしいって。ね、ティファ！」

腐女子・ユフィが腐女子リーダー・ティファに言う。
ティファが納得してしまうと、クラウドは逃げ道が消える。

「そーね。ってことでクラウド！痛い目見たくなかったら、おとなしくこのヅラ被りなさーい！」

一体どこから取り出したのか、ティファが手にしているのは何と金色のカツラ。ご丁寧にきちんとエアリス・ヘアーがしてある。つまり、始めからクラウドにもさせる気は満々だったのだろう。
カツラの長さは腰辺りで、リボンはまた再び髪（カツラ）より少し短いくらいで色は青。

セフィロスに影響されたのか、ティファはカツラをヅラと言ってるし、目は腐女子が格好の獲物を見つけた時のような……つまりはキラキラ輝いているし。

「ねぇ、セフィロス」
「なんだ、小娘」

ユフィが黒笑み満面でセフィロスに近づいて話し掛ける。流石腐女子は怖いもの知らずだ。
そんな最中もユフィの視線はクラウドに据えられている。

「あたしはウータイ一の美少女くの一ユフィちゃんだ！もう……。まぁいいや。クラウド捕獲手伝って」

語尾にハートマークが付きそうな勢いである。

「何？」
「なっ……ユフィ？！」

クラウドの呼び掛けに全く反応しないユフィ。
セフィロスが怪訝そうに眉を潜めた。

「だってあのクラウドが長髪、しかもエアリス・ヘアーしてるのが見れるのよ？かなり面白……貴重だと思わない？」
「おいユフィ！今面白いって言おうとしただろう！」

どうやら本音が漏れてしまったようだ。
ユフィはクラウドの抗議を黙殺し、ティファが黒笑みを浮かべながら指を鳴らしてクラウドを黙らせる。

「……いいだろう」
「セフィロス？！」

意外だったセフィロスの返答に、クラウドは泣きたくなった。

「確かにおもしろ…貴重だ。今回だけ特別に手を組んでやろう」
「やったね」

ガッツポーズを決めるユフィ。

「おいセフィロス！お前もか！」

非難の声を上げるクラウド。
最後の頼みと、彼はヴィンセントを見やる。
しかし――

“我関せず”

とばかりに明後日の方向を向いている。
最後の頼みの綱が切れた中、クラウドは思った。

――――俺も、ああなるだろうな…。

ヴィンセントの行動は腹が立つが正しい。きっとクラウドも同じことをされていたら、同じ行動をとったことだろう。エアリス・ヘアーなんかにされていたら尚更だ。それにユフィとティファだけならまだしも、そこにセフィロスが加わったのだから、勝てる気など戦

う前から萎えてしまった。

とにかく逃げに専念しよう。

そう決意するクラウドだった。

今は剣を川辺に置いたままだ。取りに行く間にやられてしまう。

ジリジリと近寄ってくる三人と、ジリジリ離れていく一人。そして傍観者が一人。

異様な光景だった。この場にエアリス・ヘアーの人間が三人。しかも、内二人は男だ。

異様だった。

「先手必勝！」

クラウドが逃げる前にティファが拳を構えたまま走り込んできた。

ティファの拳には絶対当たりたくなかった。

ある意味セフィロスより恐ろしい。

「くっ」

とっさにかわすクラウドだったが、避けた場所にはユフィがけりを構えていた。

「にしし…」

それも辛うじてかわすが、その際に体制を崩してしまう。

目を見開くクラウド。

「しまっ…！」

「終わりだ」

そこには、少し目がキラキラと輝いているセフィロスがいた。体制を崩したままではセフィロスの拳をかわしきれない。
その時、セフィロスの美しく揺れるエアリス・ヘアーが視界に入った。銀色に光りながら揺れるセフィロスのエアリス・ヘアーに思わず見入ってしまったクラウドは、そのままセフィロスにみぞおちを殴られ気絶。
だが、気絶する直前に思ったことがあった。

――――何で…何でこいつらこんなにコンビネーションいいんだ！
それにセフィロス！お前エアリス・ヘアーが似合い過ぎるんだよコノヤロー！！

とか何とか、思っていたらしい。

クラウドが目覚めると、きっちりエアリス・ヘアーのカツラ――――
――セフィロス曰くヅラ――――は付けられていた。

クラウドは怒る気力も失せ、座り込んだまま顔を伏せている。
周りでは腐女子二人が涙を流しながら大笑い。セフィロスも堪えているのだろうが「ククク…」という笑い声が漏れている。
全員、クラウドを直視していなかった。

「……」

だんまりのクラウド。
まさにさっきまでのヴィンセント状態だ。
クラウドが気絶している間にでも洗ってきたのか、エアリス・ヘアーの名残だろうパーマが微妙に残っているヴィンセントが近づき、慰めるように彼の肩を叩いた。
さっきとは逆の展開である。

「あー最高！これいいよ！どっちの写真も最高！」

そう言いながら手の中にあるエアリス・ヘアーのクラウドの写真を持て遊んでいるユフィ。その中にはヴィンセントのものも幾つか含まれていた。
もちろん写真の中の二人は気絶状態だ。
そして誰もユフィの「絶対これは高く売れる…」という言葉を聞いたものはいない。

「中々似合ってるんじゃない？」
「私程ではないがな」

ティファとセフィロスは肩を並べてクラウドを見ながら話している。
というか、セフィロス自身今回だけだとか言っていた癖に、やけにこちら側に溶け込み過ぎているような気がしてならない。

「はぁ」

大きく、その場にいる全員に聞こえるぐらいのため息をつくクラウド。

「クラウド、クス…ため息ばっか…クス、ついてるとクスクス…幸せ、逃げるよ？クスクスクス……」

「クスクス笑いながら話してんじゃねぇよ！」

クラウド本人は承知なのか知らないが、エアリス・ヘアーで凄まれても怖くないのが現状だ。

また、本人は全く気付いていないだろうが、実は顔に少々化粧が施してある。化粧をつけたのはティファとユフィなのだが、ここをこうすれば……等々言って助言しまくったのはセフィロスだったりするのだがから驚きだ。

恐るべし、セフィロス……。

しかも、その化粧がクラウドに似合い過ぎていて逆に怖いくらいだ。まぁ、エアリス・ヘアーが非常に似合い過ぎているセフィロス程ではないのだが……。

「セフィロス……貴様はとっとと帰れ！！」

クラウドが意地になって叫ぶが、実際にセフィロスが帰ったのはそれから三時間も後のことだった。腐女子二人と共に、さんざんクラ

ウドを冷やかして。

クラウドはその後、他の仲間たちにエアリス・ヘアー&化粧姿を見られて大笑いされて、散々な1日になったことは言うまでもない。

因みに、化粧は腐女子以外の仲間に言われて気付くと、顔から血の気が引きつつも落とすために川に飛んで行ったらしい。

そうそう、クラウドがエアリス・ヘアーをのけることが出来たのは翌日。

カツラのパーマがのきかけだったらしく、クラウドの頭にカツラをつけたままパーマ液をつけた腐女子二名と元英雄は、そのパーマ液をクラウドの地毛にもつけてしまったらしい。
クラウドからすれば、とんでもなく迷惑極まりないことである。

どれだけ洗っても中々パーマが取れず、朝早くから川辺で必死に髪を洗っていたのを、全く同じ行動をとった今回の第一の犠牲者は、同情と憐れみの感情を抱いて、木の陰から静かに彼を見守っていたとか。

オマケ……

そういえば、もう一人エアリス・ヘアーをしていた人物はどうなったのだろうか……。

「ふふん……。やはり私にはどんな髪型も似合うのだ…」

かなりヤバく、危ない発言をしていた。

そして、その危ない発言の時に部屋の前を通り過ぎた運の悪かった一人の部下――――ジェノバ細胞より造られたモノ――――はこう語っている。

『主があんなことをしたり、言ったりするのは初めてです。あの人

があんなことをしたら、下手をすると造られた私たちまで全員エアリス・ヘアーになっちまいますよ…。それだけは勘弁です』

彼の言う主がエアリス・ヘアーをやめたのは、その日、クラウドとヴィンセントの事件があった日から、約三週間経ってからだったという。

密かに語ってくれた部下は翌日、主・片翼の天使の命により、自分がエアリス・ヘアーをやめるまでエアリス・ヘアーの刑になったそうな。

めでたしめでたし

end

（後書き）

結構前に書いたものなので、読み直していて恥ずかしかったです。
今以上に文が稚拙とか……穴があったら入りたい…。

エアリス・ヘアーが一体何なのか、勿論わかりますよね？
エアリスの髪型です！

あれをティファがして、
セフィロスがして、
ヴィンセントがして（されて）、
クラウドも（されて）。
そして巷で大流行とか…（笑）

自分で書いておきながら、異様な光景に開いた口が塞がりそうにありません。

エアリス、きっとライフストリームから、ザックスと一緒にビックリしながら見てるんだろうなあ。
うん、ごめんなさい、エアリス。

反省はしてる。
でも、後悔はしていない！
書いていて楽しかったからね！！↑

楽しんでもらえたら幸いです。
感想などありましたらお待ちしております（敬礼）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4202p/

ブーム・エアリス

2010年12月11日04時46分発行